

## 「道化師の笑顔」

宮下 智

彼との出会いは強烈だ。三十年以上も前のできごとだ。とにかく一時も身体が止まっていない。動きつ通しなのだ。「これが教科書に書いてある多動症候群ってやつなのか・」妙にわかったつもりになっている私がいた。「四十才になっても六十才になってもこうして動き続けているんだらうか？」その原因を脳障がいに求めて、信じて疑わない私がそこにいた。

本当に彼の身体は止まらない。ジュースの空缶があれば走り出す。小石を中に入れて、カランカランと音を出して遊ぶ。目が合えばニッコリ笑い、心からこの遊びを楽しんでいるように見えた。窓が開いていれば、玄関が空いていれば、職員の間を見つけては屋外に飛び出し、空き缶置き場に走った。そして、怒られた。

それはボールでも同じだ。運動会の日、彼は教材コーナーに置いてある直径一mほどの大玉に走った。走っては、職員に追いつかれて止められた。何回も何回も走っては職員に止められた。最後に大玉にたどり着いた彼は、大玉をあらぬ方向に転がした。参加者全員の笑い声が彼を包んだ。転がる大玉を見ながら彼は楽しそうに笑った。(のように見えた)

悲しい出来事があった。いずれもあとで聞かされたことだったが、一つは養護学校の劇の発表会でのことだ。彼は、ステージに上がり、その途端上手から下手へ一目散に走った。そこには、木に見立てた大道具の枝にいくつもの空缶がぶら下げられていた。木の実に見立ててあるのだらう。彼はギリギリの高さにぶら下がっている空缶に何度となくジャンプした。彼の繰り返される必死の姿に観客は笑った。

さらに、彼は体育の授業の中で、坂を転げ落ちる空缶を何度も追い続けた。坂の長さは十mほど、これがリハビリと称する運動の時間だった。飽きる事が無いその健気な姿に皆が笑った。

彼には空缶を木の実に見立てることはとてもできないだらう。また、リハビリの意味も運動の意味も分からないだらう。これらは明らかに、彼の止まらない身体を利用した見世物だった。でも、この時も皆の笑いを受けながら彼は楽しそうに笑っていたに違いない。

彼は、もらったものを必ず横に投げる。食べ物も、帽子も、ボールも、そして表彰状も。何回繰り返しても、必ず横に投げた。その姿は、確かに笑いを誘ったが、その笑いにはさすがに蔑みが含まれていたに違いない。

一方、彼は全く融通の利かない人だ。遠足、外食、旅行・、彼はクラス以外の場所では、ほとんど食事を取ることができない。せいぜい大好きな卵焼きを数枚食べるだけ、どんなにお願いしても、叱っても固く口を閉じて開けなかった。

自転車のペダルの位置、職員室の文房具の位置、ピタリとお好みの位置に納まるまで彼は自分の身体を止めることができなかった。その位置が少しでも動けば、また彼は強迫的に自転車のペダルに、そして文房具に走った。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

それから三十年、彼は居室での放尿を始めた。今までに見たことが無い姿だった。自立しているはずの排泄の半意図的な失敗、それは明らかに反抗の姿だったが、私たちは途方に暮れた。

「なぜ？」

大人になりゆく彼を感じた私たちは、彼と相談を繰り返した。居室を一人部屋にした。缶酎ハイの晩酌を始めた。ベッドとカーテンを設置した。でも、放尿の姿は変わらなかった。

私たちの支援は振出しに戻った。彼の脳みそに「気持ちのいい」状態とは何なのか？支援の基本の基だ。放尿が始まってから五年、やっとそこに立ち戻れる自分たちがいた。

彼は食堂では落ち着けない。繰り返しお茶のおかわりの要求がある。つまり立ち歩く。食堂は高刺激の場所だから、少しでも刺激の少ない場所とフロアーのパーティーションの中に食事の場所を移動した。これで彼の食事の立ち歩きは無くなった。

行事等でとてもみんなと同じことができない彼に、(三十年も頑張ってきた) みんなと同じことをしなくてはならない場所への参加をしないことを提案した。みんなと同じことをしなくてはならない場所や時間は、心的なプレッシャーが過度にかかる高刺激の場所だ。彼はその提案を快く了承してくれたが、心配のもと、その決断を父親や母親が認めてくれるかどうかにあったようだ。幸い、父親も母親もその決断を自立の姿であると理解して下さって応援を頂けることとなった。私たちは快諾してくれた彼にちよっぴり言葉を足した。「だって、みんなに笑われるの、本当はイヤなんじゃないかなあ？」と。彼は困ったような顔をしながら、それを受け入れた。

そして、この夏から新しい挑戦が始まった。

まずは外食。本当に好きなものを確認するためにまずはバイキングに挑戦。甘いもの大好きを確認、クラスでの食事と同じように人の出入りが少ない場所を確保、氷が入っていると飲まない水から、氷を取り出せば飲むことを確認。でもずっと椅子をガタガタさせている。

次には、その経験を生かして食事場所は椅子席ではなく座敷を確保。さらに低刺激環境へ。椅子をガタガタさせて落ち着くことができない人から、座敷なら落ち着いて食事ができる人への視点の転換（リフレーミングと言います）が生じた。

彼は、慣れ親しんだクラスで使用している食器を持参して外食をするようになった。そして十一月、かつ定食とパフェを全部平らげた。初めてのことだった。

視点の転換は、服装の選択においても生じていた。入浴後の服装、彼は度々職員の用意した衣類を拒否した。考えれば当たり前のことだけれど、彼は自分のお好みの服を着たかったのだ。けれども、職員にはその姿は、頑固、こだわりと映っていただけで決しておしゃれの姿には見えなかったのだ。体躯の小さい彼には、時には子供服売り場での購入があった。担当職員はできるだけ成人用のSサイズを求めて、彼を連れ歩いた。だって、おしゃれな大人は決して子供服売り場では服は買わないからね。

そして、彼は、ゲームセンターでUFOキャッチャーをして、プリクラを撮った。ゲームセンターの電子音、そして瞬く光、考えてみれば彼の大好きなものだ。彼の脳みそにとっては限りなく快感に違いない。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

そんなこんなので四ヶ月、先月の職員会議のこと、彼のこの四ヶ月の行動変容について話し合いがもたれた。

「なんか最近、職員の近くに何か話したそうに自分から寄ってこない？」「そうそう、寄ってきても頭をグリグリこすりつけてこないしね」「職員室にも必死に入ってこようとしないよね」「確かに文房具の位置、さほど関心を示さないよね」「キーボード交換もほとんど無いよね、何十年もキーボード交換ってあったんでしょ」「今まで自転車に乗るときは必ず自転車のハンドルの前の籠に入れていたのに、最近は全く入れずに倉庫の前の段ボールの箱に入れてるよ」「しかもクラスに帰る時にすっかり忘れそうなきももある」..

すると誰かが「彼、最近自分から何か挨拶しない？ほら、コッって言って、頭をちょっとかしげてさあ..」とつぶやく。

実は、ずっと思ってきたことがある。彼の持ち歩くキーボード、昔はすぐに電池が無くなるほど音を鳴らしていたものだ。今は音が鳴らなくても肌身離さず持ち歩くそのキーボード、ひょっとしたら一人ぼっち気分の彼の唯一のお友だちではないのかと。

キーボードを置き忘れそうになる彼と、同時期に始まる積極的な挨拶の姿、それはいったい何を意味するのか。

「このところ、放尿が無い日がない？」また、誰かがつぶやく。

彼は、今ゆっくりと自分の幸せを考え始めている。みんなを笑わせるためでなく、自分が心から笑えるために。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>